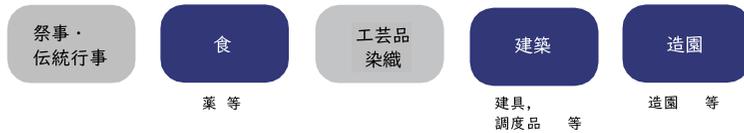


「京都市らしさ」との関わり



生物資源の利用と調達状況の例



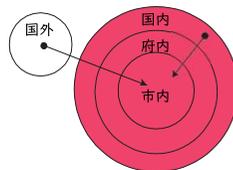
造園

<現状>
 ・庭園の四季を彩る資材として用いられた花の1つ。かつては周辺で採取されたものを使ったと考えられるが、現在は主に購入している。

容易 やや難 困難 不明

-入手難易度-

●入手先



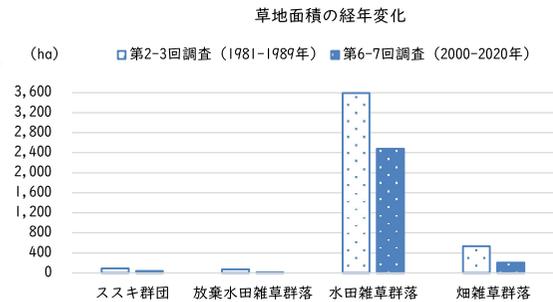
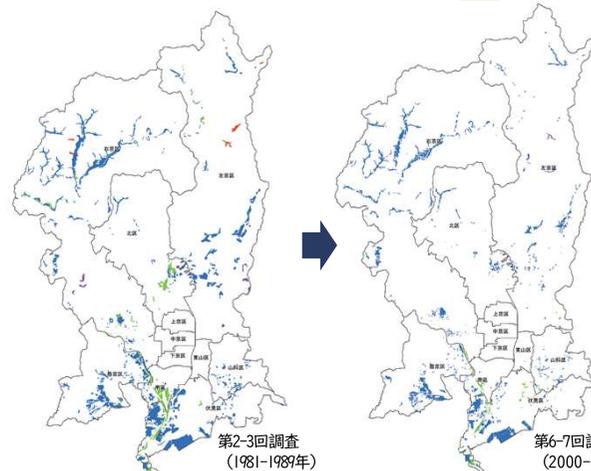
・国内産を利用

キキョウの分布と生態

キキョウは山野の草地に生え、太い根茎は深く地中に入り、茎は高さ40-100cm、ときに上方が分枝する。花期は7-8月、茎頂近くに数個付き、花冠は直径3-5cm、花柄があり、青紫色であるが、淡紫色や白色のものもある。北海道~九州・奄美群島(諸島)、朝鮮半島・中国・ウスリー・アムールに分布する。観賞用としても栽培され、園芸品種も多い。根茎を水洗し、細根を取り除き乾燥したものが漢方の桔梗根で、薬用にされ、咳や痰を取り、気管支炎などに効くと言う。

分布(資源)量の推移

■ ススキ群落 ■ 休耕田雑草群落 ■ 水田雑草群落 ■ 畑地雑草群落



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回(1981-1989年)と第6-7回(2000-2020年)の調査結果を比較すると、キキョウが生育する草地環境(ススキ群落、放棄水田雑草群落、水田雑草群落、畑地雑草群落)と考えられる植生が大きく減少していることが分かる。

出典: 1/50,000及び1/25,000植生図「京都府」GISデータ(環境省生物多様性センター)を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

獣害

担い手(管理)不足

外来種

都市化

ニホンジカ等獣害被害の増加。

耕作地等含め、管理不足から放置化。

外来種が繁茂し、在来種の生育環境が悪化。

質の推移

従来の状況(田園環境)



現状(田園環境)



耕作の放棄

京都市で見られる草地環境は、主に水田雑草群落と畑地雑草群落である。しかし、耕作放棄地の増加による植生遷移などの生育環境の悪化が見られる。また、山に人の出入り(登山道・林道の利用や山の管理等)がなくなると、林床にコシダや常緑広葉樹の低木が繁茂して日照不足になり、草地性植物の生育が困難となる。

「京都市らしさ」としての位置付け

指標種: キキョウ

ハビタット: 草地



① 造園の資材等との関わりが深く、京都らしい庭園風景を継承していくには必要な生物資源。

② キキョウとともに、オケラ、ススキなど草地性の植物全般をハビタットして捉え、保全・再生を図ることが考えられる。

③ 市内の草地面積は少ないものの、草地植物の活用は、祭事・伝統行事(オケラ、フタバアオイなど)、造園(キキョウ、オミナエシなど)などの構成要素で使われてきた。

